川越市立大東西中学校 学校だより
きらめき
令和８年１１月２日発行
第８号
川越市立大東西中学校
校長　小川　潤也

学校教育目標　『豊かな心をもち、たくましい生徒 ～ 夢や希望をもつ生徒 ～ 』
○自ら考え、自ら学ぶ生徒　○豊かな心を育む生徒　○心身の健康に努める生徒

読書の秋に思うこと

校長　小川　潤也

少し冷えた秋の空気が心地よい季節となりました。木々の葉も色づき始め、いよいよ秋本番を迎えています。この時期は、さまざまなことにじっくりと取り組むのに適しており、「芸術の秋」「スポーツの秋」「読書の秋」「食欲の秋」など、秋ならではの楽しみ方があります。気候が穏やかになり、落ち着いて物事に向き合えるこの季節だからこそ、新しいことに挑戦したり、普段はなかなか時間を取れないことに取り組んだりするのもいいと思います。

「読書の秋」という言葉には、どのような由来があるのでしょうか。中国・唐代の文人である韓愈（かんゆ）が残した詩に、「燈火（とうか）親しむべし」という一節があります。これは、秋の夜は涼しく、灯火の下で読書をするのにふさわしいという意味です。この言葉が、読書の秋の由来の一つとされています。夜が長くなり、静かに過ごす時間が増える秋は、本と向き合い、自分の世界を広げるのにぴったりの季節なのかもしれません。

さて、「活字離れ」という言葉が聞かれるようになって久しくなります。子供たちは、もともと本の世界に触れ、物語を楽しむ力をもっています。絵本を開いて物語の世界に入り込んだり、登場人物の気持ちを想像したり、次の展開を楽しみにしたりする姿は、子供たちにとって自然なものです。しかし、成長するにつれて、テレビやゲーム、インターネットなど、さまざまな楽しみや情報に触れる機会が増え、読書から遠ざかってしまうこともあるのではないでしょうか。短い時間で多くの情報を得られる便利な環境が整っている一方で、一つのことにじっくりと向き合う時間を確保することは、以前より難しくなっているのかもしれません。

インターネットを通じて、手軽に多くの情報を得られる時代に、あえて一冊の本を手に取ることに、とても意味があると考えます。本には、単に知識や情報を得るだけではなく、私たちの心に深く残り、ものの見方や考え方の土台となる力があります。優れた本には、作者が長い時間をかけて考えたことや、経験を通して見つけた大切なことが込められています。私たちは本を読むことで、自分一人では経験できない出来事に出会い、自分とは異なる考え方や価値観に触れることができます。時には、登場人物の喜びや悲しみに共感し、時には、自分ならどうするだろうと立ち止まって考えることもあるでしょう。そうした一つ一つの経験が、私たちの心を豊かにし、他者を理解する力にもつながっていきます。

また、本を読むことは、すぐに答えが見つからない問いについて、自分なりに考える時間をもつこともできます。読み進める中で新たな疑問が生まれたり、これまで当たり前だと思っていたことを違う角度から見直したりすることもできます。こうした経験を重ねることで、子供たちは、自分の考えを深め、物事を多面的に捉える力が育っていくのだと思います。本の世界で出会った言葉や考え方は、読み終えた後も心の中に残り、日々の生活の中でふと思い出されることがあります。そして、少しずつ自分自身の考えを形づくる糧となっていきます。

自分が実際に経験していないことでも、本を通して想像し、理解を深めることができます。こうした力は、学校での学習はもちろん、友達との関わりや、これから先の人生においても大切なものです。本を読むことの大きな意味は、単に多くのことを知るだけでなく、自分の世界を広げ、自分自身の生き方を考えるきっかけを得られるところにあるのではないでしょうか。

また、読書を知識を得るためだけのものと捉えず、楽しむことを大切にしたいものです。学習に関わ

る本や名作だけに限らず、物語、科学、歴史、自然、スポーツ、趣味に関する本など、子供たちの興味に応じて幅広いジャンルの本に触れる機会をつくることも大切です。最初から長い本を読む必要はありません。好きな分野の本を一冊手に取ってみる、気になったページを開いてみる、短い時間でも毎日読む習慣をつくるなど、小さなきっかけから読書の世界は広がっていきます。読み終えた本について家族で感想を話し合ったり、お互いにおすすめの本を紹介したりすることも、本の楽しさを共有するよい機会になるでしょう。

この「読書の秋」をきっかけに、子供たちがたくさんの本と出会い、心に残る一冊を見つけてくれることを願っています。そして、本を読む楽しさを知るとともに、さまざまな考え方や生き方に触れながら、自分の世界を少しずつ広げていってほしいと思います。